

操り浄瑠璃史と淡路人形

神戸女子大学 阪口 弘之

『浄瑠璃御前物語』(梗概)

- 1 三河の国司かねたかは海道一の遊君を妻にしていたが、子がないので峰の薬師に祈り、浄瑠璃姫を授かる。(申し子) 《本地譚》
- 2 牛若丸は金売吉次に伴われ、奥州へ下る途中、矢矧の宿に泊まり、浄瑠璃姫の御殿で催す管弦に笛を合わせて、ついに一夜の契りを結ぶ。(主部)
- 3 牛若は再会を約して別れるが、駿河の国で病気になる。吉次は先に出発し、牛若は吹上の浜に捨てられ、危篤に陥る。そこに八幡宮が現われ、牛若丸の急を姫に告げ、姫は侍女の冷泉と共に来て牛若丸を助ける。(吹上) 《利生譚》
- 4 牛若丸は奥州秀衡の許に着き、数万騎を率いて都に上るが、浄瑠璃姫はすでに空しくなっていた。そこで墓を尋ね、法華経を唱えて回向の和歌を詠む。すると五輪が砕け、一つは牛若丸の袂に、一つは空中に、一つは墓の標として残った。その跡に寺を建て、冷泉寺と名付けて、侍女冷泉に賜った。(五輪砕) 《縁起譚》

浄瑠璃の起源

- 1 康正 元年(一四五五) 瑠璃光山安西寺略記 室木弥太郎③ 『語り物の研究』
- 2 文明 七年(一四七七) 実隆公記 七月紙背文書 沢井 耐三④ 『守武千句考証』
- 3 十七年(一四八五) 梅花無尽藏 高野 辰之② 『歌舞音曲考説』
- 4 大永 七年(一五二七) 宗長日記 柳亭 種彦① 『足薪翁記』
- 5 享禄 四年(一五三二) 宗長日記 八月 〃 〃 ① 『還魂紙料』
- 6 天文 九年(一五四〇) 守武千句 〃 〃 ① 『還魂紙料』
- 7 元亀 二年(一五七二) 言継卿記 〃 〃 〃 〃 ① 『還魂紙料』
- 8 天正十五年(一五八七) 言経卿記 四月一日 〃 〃 〃 〃 〃 〃

- 1 「瑠璃光山安西寺略記」に拠って、康正元年(この年、西郷頼嗣岡崎築城)、尾ヶ崎原にあった浄瑠璃姫の庵室が移されて、本丸の持仏堂とされたことが判明。
- 2 □ちたうにはいつものしやうるり御せんした/□□のなとをかたられ候は、よく存候 憩^二矢作宿^一
- 3 出^二刈谷城^一三里余 宿云^二矢作^一記其初^一 伝聞長者婿^二源氏^一 秋水瘦辺閑渡^二驢^一
- 4 柴屋軒宗長が「矢矧の渡りして妙大寺」を通った時、「昔の浄瑠璃御前跡、松のみ残て」
- 5 小座頭あるに。浄瑠璃をうたはせて興じて一盃にをよぶ (宇津の山辺)
- 6 たんじやくかくにびはななひきそ
いとどだにざとうまがひの杖つきの
じやうるりかたれともし火のもと
こよひはや時はうし若深はて、

操り浄瑠璃の成立——京の浄瑠璃と叟西宮(淡路)の人形戯

○浄瑠璃はそのころ。京の次郎兵衛とかやいふ者。後には淡路丞と受領せし。西の宮の夷かきをかたらひ。四条川原にして。鎌田の政清か事を。かたりて。にんぎやうをあやつり。そのうちがうの姫。あみだのむねわりなどいふ事をかたりける。次に河内左内といふもの出たり。女にも。なむゑもん。左門。よしたかなど。浄るりをかたりけるを。哥舞岐と一同に。女はとめられぬ。(『東海道名所記』卷六、万治1658〜61末年頃)

○浄瑠璃太夫ハ文禄年中ヨリ慶長ニ及テ監物某並ニ次郎兵衛某撰州西ノ宮ノ傀儡師ヲ招テ相共ニ之ヲ經營ス。監物某並ニ次郎兵衛浄瑠璃ヲ談リ、西ノ宮ノ人ハ人形ヲ舞ス。其ノ始メ纒ニ幕ヲ両楹之間ニ張り、人形ヲ其ノ上ニ舞ス。河内ノ介是レ浄瑠璃太夫受領之始メ也。次郎兵衛後ニ上総ノ介ト称ス。(『雍州府志』卷八、貞享三年1686)

○まつ祇園のやしろへともなひゆくに、四条河原をとをらせ給へは、こゝかしこに、さしき、ねすみたうをかまへ、そのいゑのまくをはりよせ、太鼓を打ならしけるほとに、露殿よりて、かくを見給へは、きたる十五日より、此うちをひて、観世能御さ候、太夫、よしの、つしま、とさ、ていか、をのえ、たかしま、いつれもめい人たちなり、御のそみのかたは御見物あれとそかいたりける。又、一方には、さとしまかふきとかくも有、又、此内にをみて、のふあやつり御さ候、太夫は河内のかみとかくもあり、さなはいしやうるりとかくも有、山ふたといふいき物も有、さまのていうく、ま事に花のみやこそと、露殿、けふをそさまされける。(『朝かほの露のすけ』露殿物語)寛永初年成立)

夷昇・夷まはし・傀儡(傀儡師)と能操り

○昼、寝殿へ召候テ、エビスカキ参候、△四人ニ能サセラル (『私心記』天文二四11555年・二・一五)

○摂津国備倭子九州令一見、只今帰国候、貴嶋へも可参之由申候間、啓一礼候、猶々茂彼能御見物有度候者、旁々被仰談、能之儀可被仰付候、於爰許雖能仕度由申、去夏被仰出辻候条、不能兎角候、委曲此者より可申候、此由可得御意候、恐々謹言 (敵島・野坂将監宛「江良房榮書状」天文末11555年頃)

○ゑびすかきまいり候て、御かかりにてまふ、このほとまいり候ゑびすかき、みなみな一たんとのちやうすにて、ほんののふのことくにしまいらせて、一たん一たんおもしろき事なり (『御湯殿上日記』天正一八11590年・一・一八)

○雨天、院参、飯後阿弥陀胸切ト云曲ヲ仕夷昇ノ類ノ者推参トソ、於御庭緞子幕等ヲ引廻シテ有曲、奇意ノ事也、又、賀茂・大仏供養・高砂ノ能ヲモ仕候 (『時慶卿記』慶長一九11614年・九・二二)

*雨、院参、阿弥陀ムネハリ其外種々ノアヤツリアリ、参衆之輩、西洞院宰相(時慶)・同中納言・予・北畠侍従・五条少納言・土御門(泰重)等也、御振舞アリ (『言緒卿記』右同)

○仙洞ヨリ被召間致候、エヘスカキアリ (『言緒卿記』慶長二〇11615年・八・二〇)
*院御所へ致祇候候、ゑびすまはし御見物、各々見物也、西洞院父子、予、傀儡相終、

夜マテ如常 (『泰重卿記』右同)

○宰相ヨリ今日エヒスカキ御間可參也、おふく・宝慈院被遣候、一間斗之舞台ヲ立、ハシカカリ有之、式三番已下如能由也、笛鼓以下無替義由也、珍義也、手ククツノ様ナル由也 (『資勝卿記』元和五〥1619年二・三)

○今日エヒスカキ催云々、東戸ノワキニ舞台ヲ立、ソレヨリ南カクヤノカコイ也、脇能高砂・八嶋・源氏供養・船弁慶・春栄・行家・黒塚・鶴飼・祝言方生川、九番也 (『資勝卿記』元和七〥1621年一・二三)

文献からみる西宮の人形戯

○夷舞 津国西宮より出るゆへに夷舞しと号す、西宮のさしむかひ海をへだて、淡路嶋にも此流有、むかしは多ひすの鯛を釣給ひし所を仕方にして春の始に出けるとなり、今は能のまね色々をつくす (『人倫訓蒙図彙』卷七、元禄三〥1690年・七)

○イツレノ代ニカ初リケン、西ノ宮ノエビスカキトテ、人形等箱ノ中ニシタタメ、其ノ箱ヲ頭ニカケテ、大路ヲ鼓シテ勅進スル乞食ヨリ事起テ、守領ノ名ヲ得ルニイタルコト、衰世ノ一奇事なり。 (『寸長庵雜記』明暦三〥1657年・五・二)

○津国にしのみやより出るくわいらいしといへるは、人形箱をうしろにおゐて、是も春は他こくへめぐりて家ノにて人ぎやうを廻し袖こひをする。おさあひつきしとふて、あれノしやのノころもがきたはとて友をよぶ。くわいらいしおとけものにて人形につゝみたいこをうたせきつねを出しておどす也 (『このころ草』天和二〥1682年・一)

○京わらんべ此でくるぼうを、しやのノ衣といへり、按ずるに紗々衣なるべし、其ゆへは先まはしはじめに、呉服をうたふゆへに名づく歟 (『諸国遊里好色由来捕』元禄五〥1692年)

○木偶ヲ弄スル者を傀儡師(テク、ツ・デクツカヒ)ト曰。本朝摂州西ノ宮自リ出ル。俚俗之ヲ箱出狂(テクル)坊ト謂。 (『書言字考節用集』第四・人倫、享保二〥1717年・二)
○往古より此所(西宮)の民、春の初めニ女人形に呉服の所作事を舞す也。是を紗のノ衣と号せり (『竹豊故事』宝曆六〥1756年)

■井上勝志氏学位論文『近松浄瑠璃の史的研究—作者近松の軌跡—』

「監物という名乗りには、浄瑠璃語り(太夫)と言うより、西宮の夷かきに起源を持つ人形遣いという面が現れているのではなからうか」

淡路人形戯の起源

○西宮夷社隷属の傀儡師と淡路三条村との繋がり (『道薫坊伝記』「淡路座秘書」)

百太夫の淡路三条来訪 引田淡路掾(上村源之掾、日向掾)の誕生

○三番叟と夷舞(神事芸能) ↓能人形と関わるか

人形戯をもって都へ進出(元龜元〥1570年「繪旨」從四位下)

○諸国進出(「江良房榮書状」の摂津国傀儡師も淡路か)と蜂須賀家の保護政策

